

◎教育長（喜田紘雄君） 小川議員からの子供の読書に関する御質問ですが、教育委員会としては、小・中学生の読書活動の推進は最も大切に行っている取り組みであります。

まず、お尋ねの学校図書館の利用状況及び図書の貸し出し冊数の推移と国語の学力向上に関してお答えをします。

本市の小・中学生の図書館利用回数は、平成21年度では小学生が1人当たり年間91回、中学生は年間1人当たり64回でした。また、昨年度1年間の貸し出し冊数の平均は、小学生で1人当たり73冊、中学生で21冊で、合併した平成17年度と比べると小学生が43冊から約70%増の73冊であり、中学生が15冊から約48%増の21冊に増加しており、大変好ましい状況であるととらえております。こうした成果が得られた大きな要因には、全小・中学校に専任の図書館司書を配置し、読書活動を推進してきたことが挙げられます。

次に、学力との関係ですが、教育委員会はもとより、学校の先生方も読書と国語の学力は深く関係していると認識しており、各学校では、全国学力テストの結果を学力向上に生かす努力をしているところであります。

国語の力の中には、多くの漢字や言葉を習得すると同時に、文章の内容を正確に読み取る読解力、自分の考えを相手や目的に応じてわかりやすく伝えるための書く力や話す力といった表現力などが挙げられます。

一方、読書により身につくこととして、漢字の読みや言葉の意味の理解が深まる。作品を通して人の生き方を学び、みずからの生き方を考える。また、豊かな心がはぐくまれるなどの力が培われると思っております。

しかしながら、全国学力テストの結果を見ると、本市においては書く力の養成に課題があることがわかりました。読書で身につけた力に加えて、読み取ったことをまとめて書く力も極めて大切であると考え、具体的に学校では、授業の中での書くことの指導はもとより、読書記録や日記、ミニ作文を書く、また俳句をつくるなどの取り組みを通して、書く力の養成を図っているところであります。

教育委員会としては、今後とも、心を耕す読書活動を大切にするとともに、国語の学力向上にもつながる調べ学習などの取り組みを推奨していきたいと考えております。

次に、読書活動を支える司書教諭や図書館司書の役割についてお答えをします。

小川議員御指摘のとおり、学校図書館は学習情報センターとしての機能

と読書センターとしての機能を持っており、子供たちの生きる力をはぐくむためには重要な役割を果たしております。

こうした中、先生方の中心になる司書教諭は、図書館司書と互いに連携しながら、学校図書館の年間利用計画を作成し、それに基づいて子供たちの学習活動に図書館を有効活用できるようにしております。加えて、本市では松任図書館内に学校図書館支援センターを設け、市内の全学校図書館と公立図書館が図書の資料を相互に貸し借りできるシステムを確立しております。

一方、読書センターとしての機能の充実につきましては、先ほど貸し出し冊数の状況をお話ししましたが、図書館司書の働きが極めて大きく、欠かせないものと考えております。

図書館司書は、本の選定や配置に気を配り、季節感のある掲示や年中行事に合わせて本を特集展示するなど、図書館が子供たちにとって心温まる魅力的な空間となるよう、心配りと工夫を凝らしております。さらに、子供たちの読書に関する相談に応じたり、学齢に応じた推薦図書を図書館だよりで紹介するなど、量とともに質の高い読書を推奨する活動も行っております。

本市としましては、学校図書館が今後も子供たちの学習意欲を満ち、魅力ある授業づくりに貢献できるよう、司書教諭や図書館司書だけでなく、全教職員が今以上に図書館を生かす学習や読書活動の推進ができる環境づくりに努めたいと考えております。

次に、家庭で本を読む、いわゆる家読（うちどく）の推奨についてお答えをします。

市内では、学校だよりやPTA広報を通して、家族で読書をすることを勧めている学校もあり、親子読書という名目で家読と同様の実践がなされている学校があります。「早寝・早起き・朝ごはん」やテレビやゲームを我慢するノーメディアの取り組みとあわせて、親子読書を推奨しているところです。親子読書は、家族ぐるみの読書が新しい話題を家族に提供し、家族の会話がふえ、ゆったりとした時間を共有することで家族のきずながより確かなものになったと実感する家庭もふえているようであります。

小川議員御提案の家読は大変よい取り組みでありますので、今後は全市的に広める方向で検討していきたいと考えております。

以上です。